

# R. ヴァーグナーの楽劇『ジークフリート』 におけるジークフリート像の特質

石川 栄 作

Zur Charakteristik der Siegfriedgestalt  
in R. WAGNERS »Siegfried«

Eisaku ISHIKAWA

## Abstract

Richard WAGNER hat den Text des »Siegfried«, wie allgemein anerkannt, hauptsächlich mit den nordischen Materialien »Edda« und »Völsungasaga« geschaffen. Die Siegfriedgestalt, die er dort entwickelt hat, ist aber ganz verschieden von der stofflichen Gestalt. Die Charakteristik seiner Gestaltung besteht darin, daß das Wachstum der Hauptperson stufenweise in aller Ausführlichkeit geschildert ist.

Siegfried tritt nämlich im 1. Akt als ein wilder Knabe auf, der im Wald mit Vögeln und Tieren spielt. Aus dem Zusammenleben mit ihnen wird er sich allmählich des Ich bewußt. Er sehnt sich als die erste Stufe des Ich-Bewußtseins nach den Eltern. Sobald er vom Pflegevater Mime erfährt, seine Eltern seien schon tot, entschließt er sich, mit dem neu geschmiedeten Schwert Notung, Andenken seines Vaters, aus dem Wald in die weite Welt fortzuziehen. Er bleibt aber dann noch unwissend, so daß er sich, vom listigen Mime betrogen, zu einem ungeheuren Schlangenzug begibt, um das Fürchten zu lernen.

Siegfried versenkt sich auch im 2. Akt unter der Linde im Wald immer noch in Gedanken an seine Eltern. Er ist jetzt dabei, als ein Menschenkind gerade unter der *Linde* aufzuwachen, die ihm als der Mutterleib seiner Mutter Sieglinde hilft. Der folgende Kampf mit dem Wurm bedeutet ihm also die Probe zur Erfahrung des Fürchtens, mit anderen Worten, zum Ich-Bewußtsein und zur Gewinnung seiner eigenen Identität. Der Wurm lehrt ihn aber weder das Fürchten noch seine Herkunft. Die Erkenntnisse gibt ihm ein Waldvogel: er kann nun durch Genuß des Wurmbutes die Stimme des Vogels verstehen. Nach dem Rat des Vogels geht er in die Höhle und findet dort den Tarnhelm und den Ring. Der Hortbesitzer tötet

dann auch, wie es der Vogel rät, den Pflegevater Mime, der mit List gerade den Ring begehrt hat. Er erfährt ferner von der Vogelstimme, daß das herrlichste Weib Brünnhilde auf hohem Felsen schläft. Ihn ergreift sofort heftige Sehnsucht nach dem Weib. Er eilt, zu der weiblichen Liebe gedrängt, auf den ringsumher brennenden Felsen.

Siegfried kann im 3. Akt auf dem hohen Felsen zum erstenmal das Fürchten erfahren, als er Brünnhilde vor seinen Augen findet. Das bedeutet sein Erwachen zum weiblichen Geschlecht. Er wacht jedoch im strengsten Sinne nicht ganz geschlechtlich auf. Damit er selbst erwacht, muß er die Maid erwecken! So küßt er die Maid, um sie zu erwecken. Endlich erwacht sie. Ihr Erwachen bedeutet ihr selbst die Auferstehung des Lebens und dem Wecker das Aufwachen zur weiblichen Liebe. Siegfried verwandelt sich nunmehr in den liebenden Mann Siegfried, wie Brünnhilde in die liebende Menschenfrau. So kann Siegfried erst durch die erwachte Brünnhilde seine eigene Identität gewinnen.

Daraus ergibt sich, daß die Erfahrung des Fürchtens als ein konsequentes Motiv im ganzen Werk eine wichtige Rolle spielt. Durch die folgerichtige Entfaltung dieses Motivs, das selbstverständlich aus GRIMMS »Märchen von einem, der auszog, das Fürchten zu lernen« stammt, ist es dem Verfasser gelungen, das Wachstum des Siegfried stufenweise zu schildern. Sein Werk »Siegfried« behandelt nicht nur das Aufwachen der schlafenden Brünnhilde, sondern auch das Erwachen des jungen Siegfried, der nach seiner eigenen Identität strebt. Der neu geborene Siegfried, der erst durch Brünnhilde zur weiblichen Liebe erwacht, symbolisiert die ideale Liebe des zukünftigen Menschengeschlechts. Das heißt, er ist das Symbol des Helden, der die neue ordnungsgemäße Welt der Menschen aufbauen kann, wo nur die Liebe vorherrscht. Diese durch Brünnhilde in Siegfried keimende Liebe gerät aber später in der »Götterdämmerung« verhängnisvoll mit der Gewalt in Konflikt, die der bittere Feind Hagen symbolisiert.

## 序

リヒャルト・ヴァーグナー (Richard WAGNER, 1813-83) は1848年4月に『ローエングリン』(Lohengrin)の総譜を完成させたあと、さらに北欧・ゲルマンの神話や伝説を読み漁っているうちに、ニーベルンゲン伝説の英雄ジークフリートに強い関心を抱くに至る。さっそくヴァーグナーは同年10月に英雄ジークフリートを主人公にしたオペラの構想をまず散文稿『ニーベルンゲン神話』(Der Nibelungen-Mythus)<sup>1)</sup>にまとめるや否や、11月にはその最終部分を台本

1) 高辻知義訳：ニーベルンゲン神話 (三光長治・高辻知義・三宅幸夫・山崎太郎編訳『ラインの黄金』白水社1992年所収)

として『ジークフリートの死』(Siegfried's Tod)<sup>2)</sup>を書き上げた。ところが、その後この作品に携われれば携わるほど、台本にはあまりにも多くの前史が含まれているという確信がいつそう強まり、ついに改作を決意する。そこで彼は1851年7月に、竜退治とブリュンヒルデの目覚めを取り扱った『若きジークフリート』(Der junge Siegfried)を書き上げたところ、さらにその物語を拡大する必要を感じて、1852年7月には『ヴァルキューレ』(Die Walküre)を創作し、さらになお同年11月にはその三部作の前に置かれる作品として『ラインの黄金』(Das Rheingold)を書き上げた。こうしてひとまず『ニーベルングの指環』(Der Ring des Nibelungen)四部作の台本は完成したが、その後1856年に『若きジークフリート』はただ単に『ジークフリート』(Siegfried)、そして『ジークフリートの死』は新たに『神々の黄昏』(Götterdämmerung)と改題されたのである。

作曲の方は台本とは逆に、物語の展開に従って1853年11月に『ラインの黄金』(1854年5月完成)から始められたが、1856年3月『ヴァルキューレ』を完成し、その後『ジークフリート』の作曲に携わっているうち、1857年6月に第二幕第二場のところで中断してしまう<sup>3)</sup>。この中断の期間に『トリスタンとイゾルデ』(Tristan und Isolde, 1859)と『ニュルンベルクのマイスタージンガー』(Die Meistersinger von Nürnberg, 1867)が完成され、『ジークフリート』の作曲が再開されるのは、中断から12年後の1869年である。再開後は作曲は着々と進み、1871年2月には『ジークフリート』の総譜が完成し、続く『神々の黄昏』の総譜も1874年11月に完成し、ここについてオペラ史上まれに見る長大な四部作が完成したのである。1848年に散文稿を書き起こしてから実に26年が経過しており、この『ニーベルングの指環』四部作こそ文字通りヴァーグナーのライフワークと言ってもよいであろう。

このような複雑な成立過程を辿る『指環』四部作となつて、特にヴォータンに重要な役割が移された感じも否めないが、しかし、作者ヴァーグナーが『指環』

2) 山崎太郎訳：ジークフリートの死 (同上書所収)

3) ヴァーグナーは1857年6月リスト宛の手紙の中でこの場面での中断を宣言しているが、しかし実際には、同年8月マリー・ヴィトゲンシュタイン宛の手紙からも分かるように、その後もこの作品への愛惜の念に駆られて作曲を続け、第二幕終わりまでの「作曲スケッチ」を終えてから長い中断期間に入ったようである。(三光長治・高辻知義・三宅幸夫編訳：『ジークフリート』白水社1994年 166頁及びC. ダールハウス著好村富士彦・小田智敏訳：リヒャルト・ワーグナーの楽劇 音楽之友社1995年 164頁参照)

の主人公として相変わらずジークフリートに最大の関心を抱いていたことは疑いない。その主人公ジークフリートが『指環』四部作の中で初めて登場するのが『ジークフリート』においてである。ここではジークフリートの若い頃のエピソードが取り扱われ、第一幕では鍛冶屋でのジークフリート、第二幕では竜退治と財宝獲得、そして第三幕ではブリュンヒルデの獲得が語られている。これらはいずれもニーベルンゲン伝説において語り継がれてきたエピソードであるが、一体、これらのエピソードはヴァーグナーの楽劇『ジークフリート』の中ではどのように取り扱われているのであろうか。本稿では、直接素材となった北欧の『歌謡エッタ』や『ヴォルスンガ・サガ』及びドイツ中世の英雄叙事詩『ニーベルンゲンの歌』はもちろんのこと、それらに関連する多くのニーベルンゲン伝説の資料をも引き合いに出しながら、ニーベルンゲン伝説の英雄ジークフリートをめぐるさまざまな伝承を整理するとともに、ヴァーグナーの『ジークフリート』を従来のニーベルンゲン伝説と比較考察することによって、楽劇『ジークフリート』におけるジークフリート像の特質を探り出すことにしたい。

## I. 鍛冶屋でのジークフリート —— 第一幕 ——

まず第一幕で取り扱われているのは鍛冶屋でのジークフリートの物語であるが、このエピソードはかなり古い伝承に属するものである。それはドイツの伝承では十三世紀初頭の英雄叙事詩『ニーベルンゲンの歌』<sup>4)</sup>においてはすでに削除されており、十六世紀の韻文『不死身のザイフリート』の冒頭部分(1-15詩節)<sup>5)</sup>でわずかながら触れられている。それによると、ニーデルラントの王子ザイフリート(Seyfrid)はとても腕白だったので、父王シグムント(Sigmund)は顧問官たちの進言に従って、息子を修行の旅に出させる。旅に出た少年ザイフリートは、とある村で鍛冶屋に仕えようとするが、持ち前の腕力のためにかえって鍛冶仕事には適しない。彼は鉄を真っ二つに切り裂き、金敷

4) Helmut de Boor(Hrsg.): Das Nibelungenlied. Brockhaus Wiesbaden 1972. 相良守峯訳: ニーベルンゲンの歌 岩波書店(岩波文庫、全2冊)1955年

5) Wolfgang GOLTHER(Hrsg.): Das Lied vom Hürnen Seyfrid. Max Niemeyer Halle 1911. なお、韻文『不死身のザイフリート』は一般に冒頭部分(1-15詩節)、主要部分(16-172詩節)そして結末部分(173-179詩節)の三つに区分されるが、その冒頭部分ではかなり古い素材に基づくエピソードが伝承されている。詳細は拙稿: 『不死身のザイフリート』におけるザイフリート像の特質 徳島大学教養部紀要「外国語・外国文学」第4巻1993年参照。

を地面にめり込ませるほどであり、そのことで咎められても、素直に教えを受け取らないどころか、逆に親方と徒弟を打ちのめしてしまう。そこで厄介払いのため親方は、少年を森に棲む竜の餌食にしようと企んで、森の中の炭焼きのところへ遣わせるのである。このエピソードはその後ハンス・ザックスの悲劇『不死身のゾイフリート』<sup>6)</sup>や十七・十八世紀の民衆本『不死身のジークフリート』<sup>7)</sup>などにも語り継がれている。

一方、この腕白少年の鍛冶屋奉公のエピソードは北欧にも伝承されていて、特に1254年頃集録された『ティードレクス・サガ』<sup>8)</sup>においては上述のドイツ伝承と類似している点が多い。ただ王子の出生に関してはかなりの相違があり、タルルンゲン国<sup>9)</sup>のジグムント (Sigmund) 王とその妃ジジベ (Sisibe) との間の息子は、父王の留守中に妃が二人の伯爵に騙されてシュヴァーベンの森へ出かけた際、そこで二人の伯爵が仲間割れしている間に、生まれることになっている。妃は生まれた子供をガラス容器の中に入れておいたが、争っている伯爵たちのうちの一人の足がそれに触れて、ガラス容器は川に流れ落ちる。妃はそれを見ると、気絶して死んでしまう。子供のガラス容器は川を下って海へ流れ出るが、やがて引き潮で陸に着く。そこへ一匹の雌鹿が寄って来て、その子供を自分の住処に連れ帰り、二匹の子鹿と同様に乳を飲ませて養育する。子供はそこで一年ほど過ごす、ある日のこと、ミーメ (Mime) という名の鍛冶屋が炭焼きのため森へ出かけたところ、その子供を見つけて、自分の家に連れ帰って養育することにした。子供はジグルト (Sigurd) と名づけられ、ミーメのもとで成長して十二歳にもなる。ところが、彼はとても腕白で、鍛冶仕事には適しないばかりか、ミーメの徒弟をおちのめしたりするので、ミーメはジグルト

6) Hans SACHS: Der hürnen Seufried. Tragoedie in sieben Acten. Max Niemeyer Halle 1880. 詳細は拙稿：ハンス・ザックスの悲劇『不死身のゾイフリート』徳島大学総合科学部紀要「言語文化研究」第2巻1995年参照。

7) Das Volksbuch vom gehörnten Siegfried. In: Wolfgang GOLTHNER (Hrsg.): a.a.O. 詳細は拙稿：『不死身のジークフリートの素晴らしき物語』——韻文から民衆本へ——伊藤利男先生退官記念ドイツ文学・語学論集「ロゴスとポエジー」1995年参照。

8) Fine ERICHSEN (Übertragen): Die Geschichte Thidreks von Bern (Thule 22. Band) Eugen Diderichs Verlag Jena 1924. 拙著：『ニーベルンゲンの歌』——構成と内容——郁文堂1992年 41-43頁参照。

9) カルルンゲン国 (Carlungen) の書き間違いだと推定されている。(Vgl. Paul PIPER: Die Nibelungen. Erster Teil. In: Joseph KÜRSCHNERS Deutsche National-Litteratur 6. Band 2. Abteilung. S.116.)

を厄介払いするため森へ遣わせることになるのは、上述のドイツ伝承の場合とほぼ同様である。

これに対して、同じ北欧の伝承でも『歌謡エツダ』（九世紀初期～十三世紀初期）や『ヴォルスンガ・サガ』（1250—60年頃成立）において語られているシグルズ（ジークフリート）になると、その出生から鍛冶屋奉公までのエピソードはかなり異なっている。ヴァーグナーが『ジークフリート』の台本を書くにあたって主な素材として用いたのは、もちろんこの北欧伝承の『歌謡エツダ』や『ヴォルスンガ・サガ』の方である。特に『ジークフリート』第一幕（第一场及び第三場）の下敷きとなっているのは『ヴォルスンガ・サガ』の第12—15章であり<sup>10)</sup>、それによると、シグルズ（ジークフリート）は、父シグムンド（ジークムント）の死後に生まれた子供とされている。すなわち、ヴォルスング（Völsung）のシグムンド王（Sigmund）がフンディング（Hunding）の息子たちとの戦いで命を落としたとき、すでに胎内に子供を宿していた妻ヒョルディース（Hjördis）は、そこを通りかかったデンマークのヒャールプレク（Hjalprek）王の息子アールヴ（Alf）に救われ、彼の国でのちに結婚する。ヒョルディースは真実を打ち明けて、大きな誉れを受けながら暮らすうち、シグムンド王の息子を産む。その子供はその後ヒャールプレク王のもとに連れて来られて、シグルズ（Sigurd）と名づけられた。シグルズはその宮廷にやって来ていた侏儒レギン（Regin）を養い親として教育を受けられる。レギンはいずれそのうちこの少年の力を借りて、竜の姿に変身して黄金を護っている兄ファーヴニル（Fafnir）を倒そうと思って、少年にその事情を打ち明ける。その話によると、「レギンの父はフレイズマル（Hreidmar）といい、息子にはファーヴニルとオトル（Otr）とレギンの三人がいた。オトルはある日、滝で魚をとっていると、そこへオーディン、ロキ及びヘーニルの三神が通りかかって、ロキの投げた石で命を落とす。父フレイズマルは三神からその代償として侏儒アンドヴァリ（Andvari）の黄金をもらう。ところが、息子のファーヴニルは父フレイズマルを殺して黄金を一人占めにし、今は凶悪な竜の姿となって、その財宝の上にとぐろを巻いて、それを護っているのである。」このような話を聞いたシグルズは、ファーヴニル退治のためにレギンに剣を造らせるが、どれもすぐ折れてしまうものであった。そこでシグルズは自分の母を訪ねて、父王シグムンドの

10) 菅原邦城訳・解説：ゲルマン北欧の英雄伝説——ヴォルスンガ・サガ——東海大学出版会1979年 32-45頁。なお、以下における人名等のドイツ語表示は Paul HERMAN (Übertragen): Nordische Nibelungen. Köln 1985. に拠る。

折れた剣をもらい受け、それでもって再度レギンに剣を造らせた。するとついに砕けも折れもしない名剣グラム (Gram) が完成し、フンディングの息子たちに対して父の仇討ちを果たすと、シグルズはいよいよレギンとの約束通りファーヴニル退治のため荒野へ出かけて行くのである。

ヴァーグナーの『ジークフリート』第一幕はまさに上記の素材をかなり忠実に利用していることが明らかである。もっとも多少の変更は認められ、例えば、若きジークフリートの母親ジークリンデ (Sieglinde) は、父親ジークムント (Siegmund) とは双子兄妹となっており<sup>11)</sup>、ジークムントがフンディングとの戦いで倒れたとき、ヴァルキューレの一人ブリュンヒルデ (Brünnhilde) に救われたあと、一人で東方の森の中へ逃げのびて、そこで一人の男児を産むや否や、命を落とすことになっている。一方、侏儒の鍛冶屋に関しても、ヴァーグナーでは凶悪な竜ファーフナー (ファーヴニル) の弟としてではなく、ニーベルングの王アルベリヒの弟として登場し、名前もレギンからミーメ (Mime)<sup>12)</sup> に変えられている。しかもミーメは、今や竜の姿となっているファーフナーを倒して財宝を獲得するため、拾い子ジークフリートのために名剣を鍛え上げようとするが、『ヴォルスンガ・サガ』の場合とは違って、名剣はなかなか出来上がらない。やがて名剣を鍛え上げることに成功するのは、ミーメではなく、ジークフリート本人の方である。楽劇『ジークフリート』第一幕第一場はまさにそのミーメが鍛冶場で名剣を鍛え上げようとして苦悩している場面で始まっている。

侏儒ミーメが鍛冶場で一振りの剣を鍛え上げるのに苦労しているところに、

- 
- 11) ただし、『ヴォルスンガ・サガ』において双子兄妹はシグムンドとシグニュー (Signy) であり、この近親相姦から生まれるのはシンフィエトリ (Sinfjötli) である。シグルズ (ジークフリート) は、上述の通り、シグムンドとその三番目の妻ヒョルディースとの間の子供 (前掲拙著 298頁の系図参照) である。ヴァーグナーは複雑なヴォルスンガ一族の系図を簡略化していることが理解できよう。
- 12) ミーメという名前は北欧神話のミーミル—— (Mimir) 「考える者」の意味——に由来する。しかし、北欧神話のミーミルは水のデーモンであり、その泉の中には知恵と思慮とが潜んでおり、オーディンはまさにこの泉の水を飲みたくて、片目を犠牲にしたのである。(E. トンヌラ：ゲルマンの神話 清水茂訳 みすず書房1975年27頁参照) ヴァーグナーの『指環』でもミーメはなるほど知恵者として登場するが、しかし、もはや水のデーモンではなく、侏儒の鍛冶屋として登場する。ちなみに、鍛冶屋ミーメは『ティードレクス・サガ』のほかに、ルートヴィヒ・ティークの二つの詩『若き日のジークフリート』と『竜殺しのジークフリート』においてもミーメル (Mimer) という名前で登場している。

森の中からジークフリートが元気よく戻って来る。熊を生け捕りにして、いとも楽しげに遊んでいることや、のちのミーメの言動などから察するに、ジークフリートは明らかに腕白少年と言ってよいほど、野性児として描かれている。その限りにおいては上述の『ティードレクス・サガ』や韻文『不死身のザイフリート』における腕白少年（ジグルト、ザイフリート）を彷彿させる。ところが、『ティードレクス・サガ』や韻文『不死身のザイフリート』に登場する腕白少年は腕力が強くて、乱暴な性格のみが強調されているのに対して、ヴァーグナーのジークフリート像は何よりもまして腕白少年の内面の変化が事細かに描かれているところにその特質があると言ってよいであろう。腕白少年ジークフリートは森の中で熊をはじめとする多くの動物たちと遊んでいるうちに、次第に自我というものに目覚めてくるからである。ジークフリートは養い親ミーメに向かって森の中で目にしたことを次のように語る。

<p>Es sangen die Vöglein so selig im Lenz, das eine lockte das andre: Du sagtest selbst, da ich's wissen wollt', das wären Männchen und Weibchen. Sie kosten so lieblich und ließen sich nicht; sie bauten ein Nest und brüteten drin: da flatterte junges Geflügel auf, und beide pflegten der Brut. So ruhten im Busch auch Rehe gepaart, selbst wilde Füchse und Wölfe: Nahrung brachte zum Nest das Männchen, das Weibchen säugte die Welpen. Da lernt' ich wohl, was Liebe sei: der Mutter entwand ich</p>	<p>春になると小鳥たちは 喜びにあふれて<sup>さえず</sup>囀り、 互いに誘い合っていた。 俺がそれに興味を示したとき、 あれは雄と雌なのだと、 お前は自ら教えてくれた。 小鳥たちはやさしく愛撫し合い、 互いに離れはしなかった。 小鳥たちは巣を作って、 その中で雛を<sup>かえ</sup>孵した。 やがて若い雛が羽ばたき、 親鳥たちは雛の世話をした。 藪の中では鹿たちも 二人で憩い、 野生の狐や狼でさえ同様であった。 雄は餌を 巣へと持ち運び、 雌は子供に乳を飲ませていた。 そこで俺にはよく分かったのだ。 愛とはどういうものなのかが。 俺は動物の母親からその子供を</p>
---	---



die Welpen nie.

決して取り上げたことはない。

このように日頃から森の中で小鳥や動物たちの生態を観察しているうちに、ジークフリートは生き物には雄と雌がいて、それぞれ仲睦まじく生活を営んでいることに気づき、それが愛というものであることを悟ると、すぐ次の瞬間には自我というものにも目覚めて、その目覚めの最初の表われとして両親への思慕をつのらせて、ミーメに次のように自らの母親のことを尋ねるのである。

Wo hast du nun, Mime,  
dein minniges Weibchen,  
daß ich es Mutter nenne?

ミーメよ、俺がお母さんと呼べる  
ような、お前の愛らしい奥さんは  
どこにいるのだい？

ミーメはこの唐突な質問に困って、「俺がお前の父親で、同時に母親だ」(Ich bin dir Vater/ und Mutter zugleich.)と言いついて逃れるが、ジークフリートは澄んだ小川で自分の姿を水に映して見たときのことを語り、そのとき自分の顔はミーメの顔立ちとはまったく違っていただけに気がついたと言って、自らの出生についてますます強い関心を示すようになる。醜いミーメがどうしても好きになれずに、ジークフリートはこれまで何度も洞窟から森の中へ飛び出していたが、いつの間にか再びミーメのもとに戻って来ている。それがなにゆえなのか、これまでは理解できなかったが、今やジークフリートにはその理由も分かってくる。

Siehst du, nun fällt  
auch selbst mir ein,  
was zuvor umsonst ich besann:  
wenn zum Wald ich laufe,  
dich zu verlassen,  
wie das kommt,  
kehr ich doch heim?  
Von dir erst muß ich  
erfahren,  
wer Vater und Mutter mir sei!

いいかい、今の俺には、以前  
いくら考えても無駄だったことが、  
自然と分かってきたのだ。  
お前のもとを離れようと思って、  
森へ走り去っても、  
なぜ俺はまたここに  
戻って来るのか？  
それは、俺の父と母が誰なのか、  
お前からまず  
聞き出さずにはいられないからだ。

父母の話をしきりに避けようとするミーメに対して、腕白少年ジークフリート

は暴力を振ってまでしつこく母親のことを問い詰めるので、ついにミーメはジークフリートの出生の秘密を打ち明ける。

Einst lag wimmernd ein Weib	あるとき一人の女がこの荒れ果てた
da draußen im wilden Wald:	森の中でうめきながら倒れていた。
zur Höhle half ich ihr her,	俺は彼女をこの洞穴へ連れて来て、
am warmen Herd sie zu hüten.	暖かい炉端で介抱してやった。
Ein Kind trug sie im Schoße;	彼女は胎内に子供を宿していて、
traurig gebar sie's hier;	さみしくここでその子を産んだ。
sie wand sich hin und her,	あちこち <sup>ころ</sup> 転げ回って苦しむ彼女を
ich half, so gut ich konnt'.	俺はできるだけ、助けてやった。
Groß war die Not! Sie starb,	ひどい難産だった！彼女は死んだが、
doch Siegfried, der genas.	お前ジークフリートは生き残ったのだ。

自分を産むために母が死んだことを知って、しばらく母親に想いを馳せていたジークフリートは、さらに自らの名前の由来とともに母の名前をも聞き知ると、最後には父親の名前を尋ねる。ところが、ミーメはジークフリートの父親に会ったこともないので答えられない。ミーメはただ母親から聞いた話に従って、父親が殺害されたことを告げる。しかし、ミーメの話を目だけでは信用できないジークフリートは、それが真実である証拠を見せてくれと言い出す。ミーメは、しばらく考えてから、保管しておいた剣の破片を持って来て、それを証拠の品として見せる。

Das gab mir deine Mutter:	これはお前の母親が、苦労や食事や
für Mühe, Kost und Pflege	世話に対するちょっとした
ließ sie's als schwachen Lohn.	お礼として俺にくれたものだ。
Sieh her, ein zerbrochnes Schwert!	見ろ、折れた剣だ！
Dein Vater, sagte sie,	母親の話では、お前の父親は、
führt' es,	最後の戦いで倒れたとき、
als im letzten Kampf er erlag.	この剣を持っていたということだ。

これを見るや否や、ジークフリートはこの剣の破片をさっそく<sup>つ</sup>接ぐよう、ミーメに強要する。しかもジークフリートは今日中にもその剣が欲しいと主張する。「今日中にもその剣で何をするつもりか」(Was willst du noch heut mit dem

Schwert?) と尋ねるミーメに対して、ジークフリートは「この森の中から抜け出て、世の中へ出て行きたい」(Aus dem Wald fort/ in die Welt ziehn.) と言い残して、再び森の中へ走り去って行く。

あとに一人残されたミーメはさらに苦しい仕事を負わされたことになる。ミーメの魂胆は、上ですでに述べたように、腕白少年ジークフリートの手を借りて、今やニーベルングの財宝を所有している竜ファーフナーを倒すことにある。そのためには名剣ノートゥングが必要であるが、それを溶接できないでいる。ところが、今やジークフリートは、今日中にその剣を手に入れたら、この森を去って世の中へ出かけて行くと主張する。剣をどうしても溶接することができないという苦悩の上に、さらにどうしたら少年を引き止めておくことができるかという難問が加わったのであり、ミーメはまったくどうしようもない状態である。

ミーメは途方に暮れて、<sup>かなとこ</sup>鉄床の後ろの腰掛けにくずれるように腰掛けていると、そこへさすらい人に身をやつしたヴォータンが登場して、第二場となる。ここでさすらい人(ヴォータン)はミーメと頭を賭けて、三つずつの問答を交わすことになるが、この両者の問答が『歌謡エッダ』中の「ヴァフズルーズニルの歌」(Vafðrúðnismál) に由来する<sup>13)</sup> ことは明白である。もっとも『歌謡エッダ』の中でオーディンが問答を交わして、知恵くらべをする相手は、物知りの巨人ヴァフズルーズニルであり、最初に質問をしかけてくるのもその巨人の方であれば、質問数もまた異なっていて、巨人が四つの質問をするのに対して、オーディンは十二の質問をすることになっている。しかも『歌謡エッダ』においてはオーディンと巨人との問答から北欧神話のあらましが明らかにされるのに対して、ヴァーグナーの『ジークフリート』ではヴォータンと侏儒との問答から『ニーベルングの指環』の世界の背景が明らかになってゆく。そしてヴォータンの最後の質問、「誰が一体この堅い破片から名剣ノートゥングを鍛え直すことができるのか」(Wer wird aus den starken Stücken/ Notung, das Schwert, wohl schweißen?) という質問に知恵者ミーメもついに答えることができない。ヴォータンは「恐れを知らぬ者だけが、ノートゥングを新しく鍛えるのだ」(Nur wer das Fürchten/ nie erfuhr,/ schmiedet Notung neu.) と言うや否や、賭けていたミーメの頭を、その恐れを知らぬ者の手に預けて、再び森の中へ消え

13) 三光長治・高辻知義・三宅幸夫編訳：『ジークフリート』白水社1994年33頁参照。なお、「ヴァフズルーズニルの歌」については谷口幸男訳：エッダ—古代北欧歌謡集 新潮社1973年 45-51頁参照。

去って行く。

ミーメはまるで打ちのめされたかのように、またもや鉄床の後ろの腰掛けにくずれるようにすわり込んだまま、途方に暮れていると、そこへジークフリートが再び元気よく森から戻って来て、第三場の展開となる。ジークフリートはミーメに、剣はできたかと尋ねる。ミーメはひどく心を取り乱した様子で、「俺に鍛えられるわけではないだろ」(Wie möcht' ich's schweißen?)と答えたあとは、ただ独り言のように、先程さすらい人(ヴォータン)が言い残した言葉を繰り返すだけである。さすらい人(ヴォータン)がミーメの頭を託した「恐れを知らぬ者」(Nur wer das Fürchten nie erfuhr)とはジークフリート自身に違いない。ミーメは今や自分の頭がその「恐れを知らぬ者」ジークフリートに委ねられたことを悟っている。知恵を絞って考えるミーメは、少しずつ落ち着きを取り戻して、「恐れを知る者が相手なら、逃れる術がある」(Wohl flöh' ich dem,/der's Fürchten kennt!)ことに気づくや否や、さっそくこの少年に恐れというものを教え込もうとする。「恐れとは何か」(Was ist's mit dem Fürchten?)と、無邪気に尋ねるジークフリートに対して、ミーメは巧妙に「これはお前のお母さんの言い付けだ。約束したことは果たさなくてはならん。お前が恐れというものを学ぶまではお前を策略に満ちた世の中へ出すわけにはゆかぬ」(Deiner Mutter Rat/ redet aus mir;/ was ich gelobte,/ muß ich nun lösen:/in die listige Welt/ dich nicht zu entlassen,/eh' du nicht das Fürchten gelernt.)と言って、母に一度も会ったことのない少年の心をうまくとらえる。ミーメの話から「恐れ」というものに興味を覚え、どうしたらそれを学べるかと尋ねるジークフリートに、狡猾なミーメは森に棲む竜ファーフナーのところへ少年を連れて行くことを思いついて、こう言う。

Folge mir nur,  
ich führe dich wohl:  
sinnend fand ich es aus.  
Ich weiß einen schlimmen Wurm,  
der würgt' und schlang  
schon viel:  
Fafner lehrt dich das Fürchten,  
folgst du mir zu seinem Nest.

ただ俺について来ればいいのだ。  
俺がお前を案内してやるから。  
よく考えて思いついたのさ。  
俺は邪悪な竜を知っているが、  
その竜はもうすでに多くの者を  
締め殺している。  
その巢まで俺について来れば、  
ファーフナーがお前に恐れを  
教えてくれるさ。

『ティードレクス・サガ』や十六世紀の韻文『不死身のザイフリート』では、上で紹介したように、腕白少年の乱暴に困り果てた鍛冶屋が、厄介払いするために、少年を森の中の竜の餌食にしようと企むのであるが、ヴァーグナーはここで「恐れを知る」モチーフを用いて、ジークフリートを森の竜のところへ行かせている。この「恐れを知る」モチーフがグリム童話の『怖れを知るために旅に出た若者の話』(Märchen von einem, der auszog, das Fürchten zu lernen)に由来することはすでに一般に認められている<sup>14)</sup>が、このモチーフはもちろんほかのニーベルンゲン伝承には見られない、ヴァーグナー独自のもので、以後の『ジークフリート』物語全体を貫くモチーフとなっており、腕白少年ジークフリートの成長過程を描く上で効果的な役目を果たしている。

とにかくこの「恐れを知る」モチーフでジークフリートは旅に出ることになるのであり、ミーメの提案を聞くや、彼は「そこへ連れて行っておくれ。恐れを学んだら、広い世の中へ出て行くのだ」(Dahin denn sollst du mich führen:/ Lernt' ich das Fürchten,/ dann fort in die Welt!)と言って、再度ミーメに剣の用意を促すのである。またもや剣のことでミーメは返答に窮していると、ジークフリートは、もうこれ以上待てなくなって、自ら父の剣の破片を手に取り、それを自ら鍛え上げるべく、仕事に取りかかる。ジークフリートの仕事ぶりを見て、ミーメはどうやら名剣が完成しそうな気配を感じるが、またもや窮地に陥る。さすらい人(ヴォータン)が予言して去って行ったように、恐れを知らぬ少年ジークフリートはまもなく名剣ノットゥングを鍛え直すだろうが、そうなれば「どうやって自分の頭を隠したらよいのか」(Wie berg ich nun/ mein banges Haupt?)とミーメは悩み始めたのである。

Dem kühnen Knaben verfiel's,	ファーフナーが彼に恐れを教えなければ、
lehrt' ihn nicht Fafner die Furcht!	俺の頭は勇敢な少年の手に落ちる!
Doch weh mir Armen!	ああ、哀れな俺よ!
Wie würgt' er den Wurm,	少年が竜から恐れを習ったら、
erfuhr' er das Fürchten von ihm?	彼は竜をどうやって倒すことができるのか。

このような「いまいましい板挟み」(verfluchte Klemme)にミーメは追い込まれたのである。そこで知恵者ミーメが、「恐れを知らぬ少年を片付ける賢明な

14) 三光長治：ジークフリート（「思索する耳—ワーグナーとドイツ近代」同学社1994年所収）25頁参照。

方法」(klugen Rat, /wie den Furchtlosen selbst ich bezwäng')として考え出したのが、薬草の汁を煎じてジークフリートに飲ませることである。その薬草汁はほんの少しでも飲めば、その者は深い眠りに落ち込むという毒薬(Truggetränk)である。狡猾なミーメは、ジークフリートが竜に打ち勝ったあと、それを飲んで眠り込んだところを、ジークフリートの剣で突き刺せばよいと考えたのである。この巧妙な知恵を自慢しながら、ミーメは、ジークフリートが剣を鍛え上げている間に、さっそくその薬草を煎じることに専心する。しばらくしてミーメがその薬草汁を煎じ終わると、ジークフリートもついに名剣ノートゥングを鍛え直すことに成功する。ジークフリートはさっそくその剣の切れ味を調べるため、鉄床に剣を打ちおろす。すると鉄床は大きな音を立てて、真っ二つに割れる。ミーメは驚きのあまり尻餅をつくが、ジークフリートは歓声を上げ、剣を頭上に高々とかざしたところで、第一幕の幕が下りる。

## II. ジークフリートの竜退治と財宝獲得 —— 第二幕 ——

続く第二幕で取り扱われているのはジークフリートの竜退治と財宝獲得である。このエピソードはほとんどすべてのニーベルンゲン伝説において語られているほど有名なものであるが、その内容の若干の相違によっていくつかのタイプに分類される。

まず第一のタイプは『ニーベルンゲンの歌』において主にハゲネの語りという形式(86-100)で伝承されているものである<sup>15)</sup>。それによると、ジーフリト(ジークフリート)は、とある山の麓<sup>かふもと</sup>でニーベルンゲン族の王子シルブクとニベルクが財宝を分配しようとしている場面に出くわす。彼らは意見が一致しないので、ジーフリトに財宝分配の役目を依頼し、報酬として名剣バルムンクを贈る。ところが、ジーフリトの分配方法は二人の王子を満足させることができずに、怒りを買う羽目となる。そこでジーフリトは名剣バルムンクでもって十二名の膂力<sup>りよりよく</sup>すぐれた巨人をはじめ、ニーベルンゲンの武士七百名をも征服したのち、二人の王子をも打ち倒す。侏儒<sup>こびと</sup>アルプリーヒはすぐさま主君たちの復讐をしようとするが、ジーフリトはアルプリーヒから隠れ蓑を奪い取った上、彼に服従を強いる。ジーフリトはこうして隠れ蓑とニーベルンゲンの財宝の所有者となり、アルプリーヒをその宝物の見張り役としたのである。またあるときジーフリトは竜をも退治し、そのとき竜の血を全身に浴びて、そのため肌が不死身の甲羅と化し、どんな武器も彼を傷つけることはできない英雄と

15) 相良守峯訳：ニーベルンゲンの歌(前編)岩波文庫 30-34頁(86-100詩節)参照。

なったという。ただ竜の血を浴びた際、ジーフリートの両肩の間に一枚の菩提樹の葉が落ちてきて、その箇所だけは血がつかずに、彼の唯一の急所となったが、その急所をハゲネはのちにクリエムヒルトから聞き出す(897-905)のである。このように『ニーベルンゲンの歌』の伝承では竜退治と財宝獲得は別々のものとして語られていることが理解できよう。

第二のタイプは十六世紀の韻文『不死身のザイフリート』の冒頭部分(1-15詩節)に読み取られる伝承である<sup>16)</sup>。それによると、とある村の鍛冶屋に奉公した腕白少年ザイフリートは、すでに紹介したように、親方の企みによって竜が棲んでいる森の炭焼きのところへ遣わされるが、しかし、そこに着いたザイフリートはたちまち竜を打ち殺したのみならず、さらには谷間で悪竜やガマや毒蛇といった多くの怪獣を退治し、それらを焼き殺す。すると怪獣どもの角質は軟らかくなって、小川のように流れ出してきたので、そこに身を浸すと、両肩の間以外は、すっかり角質の肌となったのである。このようにここではザイフリートの角質化が際立たされていて、竜退治は財宝獲得には結びつけられていない。財宝獲得についてはそのあとの13-14詩節で補足的に、ザイフリートが岩壁のところで財宝を獲得し、その財宝ゆえにのちに悲惨な殺戮<sup>きつりく</sup>が起こったという物語の結末を付け加えているだけである。

ところが、この韻文『不死身のザイフリート』の主要部分(16-172詩節)では再度ザイフリートの竜退治が語られ、伝統的伝承とは違ったふうにはあるが、再度財宝獲得についての記述が読み取られうる<sup>17)</sup>。これが第三のタイプの伝承である。この韻文の主要部分の内容は、恐ろしい竜に誘拐されたギービツヒ王の娘クリームヒルトを救い出すためにザイフリートが、巨人クペラーンとの戦いに引き続いて、竜と戦うというものである。この竜はもともと美しい人間であったが、ある女性の呪いによって竜の姿に変えられており、五年後には魔法が解けて人間の姿に戻ることになっているので、そのときにギービツヒ王の娘クリームヒルトを妻にしようと思って、彼女を誘拐したのである。従って、ここではザイフリートと竜との戦いは、財宝ではなく、一人の乙女の愛をめぐる戦いとなっている点で、従来<sup>18)</sup>のニーベルンゲン伝説とは趣きを異にする。しかし、この韻文の主要部分における竜との戦いの中で従来<sup>18)</sup>の財宝

16) 前掲拙稿(徳島大学教養部紀要「外国語・外国文学」第4巻1993年)128-135頁参照。

17) 同上論文135-156頁参照。

18) この新しいタイプの竜退治は、『ニーベルンゲンの歌』写本mやハンス・ザックスの悲劇『不死身のゾイフリート』及び民衆本『不死身のジークフリート』などにおいても伝承されている。

獲得のモチーフはすっかり削除されたわけではない。新しいエピソードとしてわずかながらこの場面に挿入されているのである。すなわち、ザイフリートと竜との戦いの凄まじさに山が崩れ落ちるのではないかと恐れたニープリングの二人の息子たちは、父親の遺産の財宝を山中より運び出させて、竜の岩の洞穴へ隠しておいたのであるが、竜と戦っていたザイフリートは、竜の火炎を避けてその洞穴に逃げ込んだところ、そこでその財宝を見つけたのである。しかし、「財宝は彼にはどうしてもよかった」(141,1)と詩人自身も語っている通り、ザイフリートにとって乙女救出がまず何よりも重要なのであり、洞穴で涼をとるや否や、すぐさま彼は竜と再度戦うために、洞穴から出て行くのである。ついに竜を打ち倒して<sup>19)</sup>、クリームヒルトを連れてヴォルムスへ帰る途中、ようやくザイフリートは洞穴の中の財宝のことを思い出し、引き返して、それを運び去るが、ライン河にさしかかったところで、それを河の中に沈めてしまうのである<sup>20)</sup>。このように韻文『不死身のザイフリート』の主要部分における伝承では、財宝獲得のエピソードは用いられているものの、伝統的な伝承とは違ったふうに取り入れられており、少なくとも竜退治とは無関係のものとして語られていることが明らかである。

第四のタイプが『ティードレクス・サガ』に見られる伝承である<sup>21)</sup>。ここにおいても竜退治と財宝は結びつけられていないどころか、財宝そのものさえ出てこない。竜の血によって鳥の声が理解できるようになったエピソードと皮膚が角質化したエピソードが伝承されているだけである。要するに、この伝承によると、鍛冶屋ミーメは乱暴な少年ジグルトを竜の餌食にしようと思って森へ遣わせたことについては、すでに述べたが、その後ジグルトは森に着くと、仕事を済ませたあと、一度に九日分の食べ物と飲み物を平らげてしまう。そこへ大きな竜が現われて戦いとなるが、ジグルトは簡単に竜を打ち倒し、それを

19) この竜との戦いではわずかながら角質化のモチーフも認められるが、伝統的な伝承とは違ったふうに取り入れられている。すなわち、竜の角質の皮膚はザイフリートの一撃や自ら吐き出す火炎で軟らかくなって流れ出てきたため、ザイフリートはその軟らかくなった竜の角に剣を振りかざすことによって、竜を倒すことができたとされているのである。

20) ただし、民衆本『不死身のジークフリート』では財宝は、ライン河に沈められるのではなく、盗賊たちの馬によって運び去られることになっており、またハンス・ザックスの悲劇『不死身のゾイフリート』においては財宝のエピソードは最初から削除されている。

21) 拙著：『ニーベルンゲンの歌』——構成と内容—— 43-44頁参照。



料理して食べることにした。斧で竜の肉を切り取り、鍋にかける。やがて料理が煮えたか調べるために指を鍋の中に入れたところ、彼は火傷<sup>やけど</sup>をして思わず指を口の中に入れた。すると彼は鳥の言葉が分かるようになり、二羽の鳥が囁<sup>ささ</sup>っているのを聞いた。その鳥のうちの一羽がジグルトにミーメの悪企<sup>あくき</sup>みを教えた。さらにジグルトは竜の血を身体や手に塗りつけると、角質となったので、衣服まで脱いで身体の至るところに塗りつけた。ただ肩の間だけは血がつかなかった。ジグルトがミーメのもとに帰ると、ミーメはジグルトの機嫌をなおそうとして、グラム (Gram) という剣などを与えるが、ジグルトは逆にその剣でもってミーメを試し斬りにした。このようにここでは竜退治の際に財宝獲得のエピソードは語られておらず、ミーメからグラムという剣をもらうだけである。ただジグルトの財宝についてはのちにアッティラ王がグリーンヒルトに求婚する際に簡単に触れられているが、しかし、ここでは竜退治と財宝獲得は結びつけられていないと考えてよいであろう。

これまで述べてきた四つのタイプの伝承は、いずれも竜退治と財宝獲得が別々のものとして語られているが、両者が有機的に関連し合っているのが北欧の『歌謡エッダ』や『ヴォルスンガ・サガ』の伝承である。これが第五のタイプの伝承である。物語を一つに纏めている『ヴォルスンガ・サガ』<sup>22)</sup>によると、父フレイズマルを殺して竜の姿で黄金を独り占めにしている兄ファーヴニルから財宝の分け前を貰えない弟レギンは、シグルズが父の仇討ちを済ませると、シグルズを唆して、ファーヴニル退治のために荒野へ出かけることになったことは、上ですでに述べたが、その後シグルズはレギンとともにその荒野に着くと、長い髭の老人(オーディン)の教えに従い、溝を何本か掘り、その中の一つに身を潜めた。竜がその溝の上に這い出てきたとき、シグルズは左の肩胛骨の下に剣を突き立てると、剣は柄のつけ根まで刺さった。竜はシグルズとさまざまな問答を交わしたのち、「黄金はそれを所有する者にとっては命取りとなるだろう」と言い捨てて、息を引き取る。シグルズは竜の心臓を切り取り、レギンの要求に従って、それを串の上で焼いた。心臓から泡が出てきたとき、シグルズは指でさわって焼けているか調べた瞬間、指を口に突っ込む。竜の心臓の血が舌に触れて、彼は鳥の言葉が理解できるようになった。鳥たちがさえずっている声から、レギンが裏切る魂胆でいることを知ると、シグルズは名剣グラムを振り上げてレギンの頭を斬り落とした。そのあとシグルズは竜

22) 菅原邦城訳：ゲルマン北欧の英雄伝説——ヴォルスンガ・サガ——東海大学出版会1979年 46-58頁参照。

の心臓の一部を食べると、ファーヴニルの通った跡を辿って洞窟に行き、そこで莫大な黄金を見つけ、ついにその所有者となったのである。このようにこの北欧の『ヴォルスンガ・サガ』の伝承では、シグルズは竜の血で不死身の肌とはならず、ただ鳥の言葉が分かるようになるだけであるが、しかし、竜退治と財宝獲得は有機的に一つに結びついていることが容易に理解できよう。

以上、五つのタイプの伝承を紹介してきたが、ヴァーグナーが『ジークフリート』第二幕で素材に用いたのは、もちろん竜退治と財宝獲得が有機的に関連し合っている北欧伝承の『ヴォルスンガ・サガ』である。もっとも多少の相違はあり、剣の名がグラムからノートゥングに変えられていることや、父の仇討ちのエピソードがなくなっている<sup>23)</sup>ことのほかに、例えば、第一場で交わされるさすらい人（ヴォータン）とアルベリヒとの対話でも明らかにされているように、ジークフリート自身は財宝（指環）については何も知らないことになっている。鍛冶屋ミーメが財宝（指環）をねらって、ジークフリートの力を利用しようとしているのであり、ジークフリートはただ「恐れを知る」ために竜の棲む森へと向かっているに過ぎない。竜退治と財宝獲得が結びついているのは、ミーメの立場から見た場合である。ジークフリートは無邪気にも「恐れを知る」モチーフで森へ出かけて行くのである。

従って、ヴァーグナーの『ジークフリート』の場合、第二幕第二場で竜退治を前にしたジークフリートは無邪気な少年として描かれており、ヴァーグナーはその前後のジークフリートの内面に最大の関心を抱いて、少年の心のうちを事細かに描写している。第一幕第一場の最後の方で養父ミーメより自分の本当の両親のことを聞き知った少年ジークフリートは、しばらくの間森の中の菩提樹の下にすわって、会ったことのない父母への思慕を募らせるのである。

Wie sah mein Vater wohl aus?	俺の父はどんな姿をしていたのだろうか？
Ha, gewiß, wie ich selbst!	そうだ、この俺に似ていたことは確かだ！
Denn wär' wo von Mime ein Sohn,	というのも、ミーメに息子が
müßt' er nicht ganz	いるとしたら、そいつはミーメに
Mime gleichen?	似ていなけりゃならないじゃないか？
Grade so garstig,	まったくきたならしくて、
griesig und grau,	白髪まじりの灰色の顔で、

23) ただし、ヴァーグナーでは「父の仇討ち」が第三幕に移されていると考えることもできる。本稿註32参照のこと。

klein und krumm,	小さくて歪んでいて、
höckrig und hinkend,	せむしでびっこを引いていて、
mit hängenden Ohren,	耳は垂れ下がっていて、
triefigen Augen ——	目はただれている——
Fort mit dem Alp!	そんな妖怪は立ち去れ!
Ich mag ihn nicht mehr sehn.	俺はもうあいつを見たくもない。

ジークフリートは、ミーメがもはや自分の本当の父親でないことを確信しているので、以前よりも増してミーメを徹底的に毛嫌いしている。養父ミーメへの反発が高まれば高まるほど、両親への思慕はなお一層高まってゆくばかりである。長い沈黙のあと、森のざわめきの中でジークフリートは今度は母への思慕をつのらせて、母への想いに耽るのである。

Aber —— wie sah	だが、——俺のお母さんは
meine Mutter wohl aus?	どんな姿をしていたのだろうか?
Das kann ich	それを俺は今
nun gar nicht mir denken!	まったく思い出すことはできない!
Der Rehhindin gleich	母の明るくきらめく瞳は、
glänzten gewiß	雌鹿のように、
ihr hell-schimmernde Augen,	キラキラと輝いた、
nur noch viel schöner!	否、もっと美しく輝いたことだろう!
Da bang sie mich geboren,	不安の中で母は俺を産んだ。
warum aber starb sie da?	しかし、なぜ母は死んだのか?
Sterben die Menschenmütter	人間の母親は、
an ihren Söhnen	息子を産むと
alle dahin?	皆、死んでゆくのだろうか?
Traurig wäre das, traun!	だとしたら、それは悲しいことだ、全く!
Ach, möcht' ich Sohn	ああ、息子の俺は
meine Mutter sehen!	お母さんに会いたい!
Meine Mutter——	俺のお母さん——
ein Menschenweib!	人間の女性に!

このようにマザー・コンプレックスにとりつかれたジークフリート像はヴァーグナーに特有のもので、上で紹介した五つのタイプのニーベルンゲン伝承にお

いてはまったく見られない。ヴァーグナー独特の新しいジークフリート像の形象であると言ってもよいであろう。しかもこのように母への思慕を募らせながらすわっている菩提樹 (Linde) の下の空間は、母ジークリンデ (Sieglinde) の胎内のような役割を果たしていると考えてもよいのではあるまいか。母ジークリンデの胎内のように優しく保護してくれる菩提樹の下で、野性児ジークフリートは今やジークリンデの息子として新たに生まれ変わろうとしているのであり、人間の子としての自我に目覚めかけようとしているのである。

長い間、母の想いに耽っているうちに、自分の上方でさえず囀っている小鳥の声に興味を覚え、葦笛を作って、それで小鳥の声の調子をまねようとするのも、その場面のジークフリートの独り言からも分かるように、もしかしたら小鳥の甘いさえず囀りが母のことを教えてくれるかも知れないと思ったからである。ところが、何度まねてみても、葦笛はなかなかうまく鳴り響かない。ついに不機嫌になって葦笛を投げ捨てて、今度はいつも持ち歩いている角笛を吹き始めた。楽しい歌が森の中に鳴り響くや否や、奥の方で何かが動き出す。ものすごいトカゲのような形の竜<sup>24)</sup> に姿を変えたファーフナーが洞穴から起き上がり、藪を押しわけ、這い出してきたのである。ここでようやくジークフリートと竜との戦いが始まるが、この場面でもヴァーグナーは、『歌謡エツダ』や『ヴォルスンガ・サガ』の場合と同じように、ジークフリートと竜との間で対話を展開させている。ただこのヴァーグナーの楽劇では、這い出してきた竜が言葉を話すのを見て取ると、ジークフリートは無邪気に「恐れ」(das Fürchten) を教えてくれと頼むのであり、ここでも「恐れを知る」モチーフが用いられている点で素材とは若干異なっていると言ってよいであろう。激しい戦いの末、ジークフリートがついに名剣ノットゥングを竜の心臓に突き刺したあと、竜が息を引き取る前にも両者の間で会話が交わされており、「大胆にもこの俺の心臓を突き刺したお前は誰だ」(Wer bist du, kühner Knabe, / der das Herz mir traf?) と尋ねる竜ファーフナーに対して、ジークフリートは「俺はまだ自分が誰なのか

24) ニーベルンゲン伝説に伝統的なこの怪獣は、作品によってそれを表わす単語が異なっており、例えば、『ヴォルスンガ・サガ』では ormr (=Wurm) のほかに dreki (=Drache) も用いられているのに対して、『ニーベルンゲンの歌』では lintrache (=lint-trache) と trache (=Drache) が用いられている。lint は Schlange を意味し、韻文『不死身のザイフリート』などでも Lindtwurmのかたちで用いられている。ヴァーグナーはこれらに対して常に Wurm (ただ一度だけ Schlangewurm) を用いているが、本稿では他のニーベルンゲン伝承との関係から「竜」という訳語を使用していることを付記しておく。

さえ、十分知ってはいない」(Viel weiß ich noch nicht,/noch nicht auch, wer ich bin.)ので、「俺がどんな生まれなのか、それを一つ教えてくれ」(Woher ich stamme,/ rate mir noch.)と頼みながら、自らの名前を名乗るのである。この竜退治の前後の両者の対話からも分かるように、ジークフリートにとって竜との戦いは「恐れを知る」ため、換言すれば、自らを知るための戦いであり、自らのアイデンティティを探求するためのものだったのである。ところが、竜はジークフリートに「恐れ」を教えることもなく、またジークフリートの素姓を教えることもなく、やがて息を引き取ってしまう。そこでジークフリートは、「死んだ者は教えてくれない。俺の生きた剣よ、俺を導いてくれ！」(Zur Kunde taugt kein Toter./ So leite mich denn/ mein lebendes Schwert!)と叫びながら、竜ファーフナーの胸から名剣ノートゥングを引き抜くと、その瞬間彼の手はあふれた熱い血でぬれ、それを吸い取るべく、思わず指を口に当てる。すると突然ジークフリートは森の小鳥の歌声が理解できるようになったのである<sup>25)</sup>。

Hei! Siegfried gehört	ハイ！ニーベルングの財宝は
nun der Niblungen Hort!	今やジークフリートのもの。
O fänd' in der Höhle	ああ、その財宝を今
den Hort er jetzt!	洞穴の中で見つけたらよいのに！
Wollt' er den Tarnhelm gewinnen,	隠れ兜を手に入れたら、
der taugt' ihm zu wonniger Tat:	それは魅惑的な冒険に役立つ。
doch wollt' er den Ring sich erraten,	さらに指環の使い道を知ったら、
der macht' ihn zum Walter der Welt!	彼は世界の支配者にもなれる！

これに答えてジークフリートは、「可愛い小鳥よ、忠告をありがとう。喜んでお前の言うとおりにしよう」(Dank, liebes Vöglein,/ für deinen Rat!/ Gern folg' ich dem Ruf!)と言って、財宝を獲得するため洞穴の中へと入って行く。この小鳥のエピソードが『ヴォルスンガ・サガ』に由来することはもはや言うまでもあるまい。ただ『ヴォルスンガ・サガ』ではジークフリートに忠告を与える小鳥は複数であったのに対して、ヴァーグナーの楽劇では一羽だけとなっている点が小さな相違点である。

25) 『歌謡エツダ』や『ヴォルスンガ・サガ』と同じようにヴァーグナーの楽劇でも、ジークフリートは竜の血で不死身の肌とはならず、ただ鳥の言葉が理解できるようになるだけである。

こうして小鳥の声に従ってジークフリートが洞穴の中に入って行っている間に、第三場の展開となってアルベリヒとミーメが登場し、洞穴の中の財宝の所有をめぐる口論する。この二人のニーベルング族の言い争いは『ニーベルンゲンの歌』における二人の王子のエピソード（上述第一タイプの伝承参照）を思い起こさせるが、財宝の分配方法で意見が一致しない点などはそのヴァリエーションと考えてよいであろう。アルベリヒとミーメは、まもなくジークフリートが洞穴から出て来る気配を感じて、それぞれ身を隠す。二人はジークフリートから財宝を奪い取ろうと潜伏場所でその機会を窺うのである。やがてジークフリートは隠れ兜と指環を手を持って洞穴の中から出て来るが、しかし、入手した宝物の機能については何も知らない。

Was ihr mir nützt,  
weiß ich nicht;  
doch nahm ich euch  
aus des Horts gehäuftem Gold,  
weil guter Rat mir es riet.  
So taug' eure Zier  
als des Tages Zeuge,  
es mahne der Tand,  
daß ich kämpfend Fafner erlegt,  
doch das Fürchten noch  
nicht gelernt!

お前たちが何の役に立つのか、  
俺は知らない。  
しかし、積み重ねられていた黄金の  
中からお前たちを取って来たのは、  
よい助言があったからだ。  
お前たちの飾りものは  
今日の記念としよう。  
この記念品は、俺がファーフナーを  
打ち倒したが、それでも恐れを  
学び取ることができなかったことを  
思い出させてくれよう。

ジークフリートは隠れ兜を腰につけ、指環を指にはめるが、彼にとってその二つの宝物はその日の竜退治の記念——竜を打ち倒したが、恐れを学び取ることができなかった記念でしかないのである。このような無邪気なジークフリートに知識を与えてくれるのは、またもや森の中の小鳥である。長い沈黙のあと、ジークフリートは再び菩提樹の中の小鳥の声に聴き耳を立てる。

Hei! Siegfried gehört  
nun der Helm und der Ring!  
O traute er Mime,  
dem treulosen, nicht!  
Hörte Siegfried nur scharf

ハイ！隠れ兜と指環は  
今やジークフリートのもの。  
ああ、彼は不実なミーメを  
信用しなければよいのに！  
偽善者の無駄話を

auf des Schelmen Heuchlergered'! ジークフリートは見抜けばよいのに!  
 Wie sein Herz es meint, ミーメの心のうちを  
 kann er Mime verstehn: 彼は理解できるはず。  
 so nütz' ihm des Blutes Genuß. 血をなめたことが役立ちますよう。

ジークフリートが小鳥の声からミーメの悪企みを知って、ただちにミーメを斬り殺すエピソードは、明らかに『ヴォルスンガ・サガ』に由来するものであるが、ヴァーグナーの楽劇でのそれはかなり長いエピソードに敷衍<sup>ふえん</sup>されて、興味深い展開を見せている。すなわち、やがて潜伏場所から姿を現わしたミーメは、薬草汁をジークフリートに勧めながら、その意志がないにもかかわらず、自らの悪企みを一部始終相手に語ってしまうのである。ジークフリートからすれば、竜の血をなめたことで、小鳥の声のみならず、ミーメの心のうちをも読み取ることができたのであろうか。とにかくこの場面で不実なミーメの意図がすべて明らかにされることによって、ジークフリートのミーメ殺害が正当化される結果にもなっている。ミーメが一刀のもとに斬り倒されるや、それを密かに傍観していたアルベリヒのあざ笑う声が岩の割れ目から聞こえてくるほどである。こうして名剣ノトウングで恨みを晴らしたジークフリートは、「今こそお前はすばらしい財宝を支配できるのだ」(Jetzt magst du des wonnigen walten!)と  
 言いながら、ミーメの死体を洞穴の中の財宝——まさにミーメが切望していた——の上へ横たえて、竜ファーフナーとともに財宝の見張り人とするのである。ヴァーグナー独特のイロニーさえ読み取られて、興味深い展開となっていることが容易に理解できよう。

一連の冒険で身体が熱くなったジークフリートは、休息を取るために再び菩提樹の下に横たわって、物思いに耽る。深い森の静けさの中、小鳥たちが仲良く囀<sup>さえず</sup>りながら飛び交っているさまを見て、ジークフリートはふと自分にもそういう仲間が欲しいと思って、小鳥に叫びかける。自分には兄弟がいなし、母親はいなくなり<sup>26)</sup>、父親も戦いで倒れた。しかも両親には一度さえ出会っ

26) ジークフリートは第一幕第一場でミーメから、自分の母親が死んだことを教えてもらったはずだが、ここでは曖昧に「母親はいなくなった」(meine Mutter schwand)という表現をしている。第三幕第三場でブリュンヒルデを一瞬母親だと錯覚する場面(本稿註33参照)があることを考慮に入れると、ジークフリートはいつの日か母親にめぐり会えるという一縷の望みを抱いているのであろうか。なお、三光長治・高辻知義・三宅幸夫編訳：『ジークフリート』(白水社) 117頁参照。

たこともない。これまで自分のたった一人の仲間といえ、醜い侏儒の養父だったが、その養父も先程自らの手で葬り去ってしまった。小鳥たちの仲睦まじい営みを目の前で見ているだけに、ジークフリートにはしきりに仲間が欲しいという気持ちが強くなってくる。小鳥に向かって「誰かよい仲間を世話してくれないか。いい人を教えてくれないか」(Gönntest du mir/ wohl ein gut Gesell?/ Willst du mir das Rechte raten?)と訴えかけるジークフリートに対して、小鳥は今度は次のような助言を与える。

Hei! Siegfried erschlug nun den schlimmen Zwerg! Jetzt wüßt' ich ihm noch <u>das herrlichste Weib:</u> Auf hohem Felsen sie schläft, Feuer umbrennt ihren Saal: Durchschritt' er die Brunst, weckt' er die Braut, Brünnhilde wäre dann sein!	ハイ！ジークフリートは 今や邪悪な侏儒を打ち殺した！ 今度は彼に <u>とてもすばらしい</u> <u>女性</u> のことを教えてあげよう。 高い岩山に彼女は眠っていて、 その彼女の回りでは火が燃えている。 彼がその火を乗り越え、 花嫁を目覚めさせたら、 ブリュンヒルデは彼のもの！
--	--

「とてもすばらしい女性」(das herrlichste Weib)の存在を知らせる小鳥の声を聞くや否や、ジークフリートは突然立ち上がって、自分の胸が熱く燃え、自分の心には火がついたような気持ちにとられる。ジークフリートは今や異性への愛に目覚め、「あこがれを持つ人たちだけが分かる」(Nur Sehrende kennen den Sinn!)愛の喜びに駆り立てられたのである。「俺にはその炎が越えられるだろうか。花嫁を目覚めさせることができるだろうか」(Werd ich das Feuer durchbrechen?/ Kann ich erwecken die Braut?)と問いかけるジークフリートに向かって、小鳥は答える。

Die Braut gewinnt, Brünnhild erweckt ein Feiger nie: nur wer das Fürchten nicht kennt!	花嫁を得ることも ブリュンヒルデを目覚めさせることも 臆病者には決してできない。 恐れを知らない者だけに それができるのだ！
--	--



「恐れを知らない者」(wer das Fürchten nicht kennt) という小鳥の声を聞くや否や、ジークフリートは歓喜の笑い声を上げて、叫ぶ。

Der dumme Knab',	恐れを知らない
der das Fürchten nicht kennt,	愚かな少年とは、
mein Vöglein, der bin ja ich!	小鳥よ、それは俺のことだ!
Noch heute gab ich	今日も俺は努力して、
vergebens mir Müh',	恐れというものを
das Fürchten von Fafner	ファーフナーから学ぼうとしたが、
zu lernen:	無駄だった。
nun brenn ich vor Lust,	今こそ俺は是非とも
es von Brünnhild zu wissen!	それをブリュンヒルデから学びたい!
Wie find ich zum Felsen den Weg?	岩山への道はどこなのだ?

ジークフリートの問いに答えるかのように、小鳥は飛び上がり、ジークフリートの回りをまわってからブリュンヒルデの眠る岩山の方面へ飛び去る。それを見て今やジークフリートは喜び勇んで、その鳥のあとを追いかけて行く。ここで第二幕の幕が下りるが、このように異性への愛に目覚めたジークフリートが小鳥の声に従ってブリュンヒルデの岩山へ出かけるエピソードも、『ヴォルスンガ・サガ』に由来するものであることは明らかである。しかし、この場面においても「恐れを知る」モチーフが貫かれていて、ヴァーグナー独特の世界が展開されていることが容易に理解できるであろう。

### III. ジークフリートとブリュンヒルデ —— 第三幕 ——

最後の第三幕において取り扱われているのがジークフリートとブリュンヒルデとの愛の結びつきである。この二人の出会いと愛情関係については、確かに『ニーベルンゲンの歌』においてかすかにその痕跡が認められる<sup>27)</sup>が、しかし、一般的にドイツ伝承においてはほとんど読み取られえないと言ってよいであろう。ジークフリートとブリュンヒルデの愛の物語は北欧において初めて生成発

27) 例えば、ジークフリートがグンテル王の伴をしてイースラントを訪れた際、ジークフリートとブリュンヒルトが交わす会話(419-421)から、二人が以前に出会っていたことが推測される。この出会いを前提にして、のちにブリュンヒルトが流す涙(618-620)を嫉妬と解釈する研究者もいるほどである。

展していったものである。ただ北欧伝承の中でも『ティードレクス・サガ』ではそれは断片的にしか語られていない<sup>28)</sup>。すなわち、そこでは確かにジグルトがグンナル王の伴をしてブリュンヒルトの城へ出かけて行った際に、二人の以前の婚約についての記述が読み取られうるが、しかし、ジグルトがブリュンヒルトと初めて出会った場面を読み返してみても、そのような記述はどこにも見当たらない。ジグルトが初めてブリュンヒルトを訪ねたのは、彼女の馬の飼育場には名馬グラネ (Grane) がいるとミーメから聞いていたからであり、そこでは二人の愛情関係についてはまったく触れられていないのである。これに対して二人の愛情関係が詳しく語られているのが『歌謡エツダ』と『ヴォルスンガ・サガ』である。特に『ヴォルスンガ・サガ』では二人の婚約が二度にまでわたって語られている<sup>29)</sup>。それによると、シグルズは小鳥たちの声に従ってブリュンヒルト (Brynhild) の眠るヒンダルフィヤル (Hindarfjall) の山に辿り着く。その山では火が燃えているような強い明りが天まで輝き上がっていた。シグルズが砦の中へ入って行くと、一人の男が完全武装のまま眠っていたが、その頭から兜を脱がせてみると、それは女性であった。シグルズが女性の鎧を斬り裂くと、ブリュンヒルトは目覚める。彼女は、オーデインの意に反してヒャールムグンナル (Hjalmgunnar) を倒したために眠りの棘で刺されたこと、オーデインに結婚を強制されたが、逆に恐れを知るような男とは結婚しない誓いを立てたことなどをシグルズに語る。さらにブリュンヒルトがさまざまな格言を話して聞かせると、シグルズは「あなたよりも賢い人はいない」と言って、彼女を妻にすることを誓う。これに対してブリュンヒルトも「あなたを一番に夫にしたい」ことを明らかにして、二人は婚約を誓い合う。その後、シグルズは彼女と別れて、彼女の姉ベックヒルト (Bekkhild) を妻にしていたヘイミル (Heimir) の邸にやって来る。そこの息子アルスヴィズ (Alsvið) からシグルズは大歓迎を受け、しばらくそこに滞在するが、ちょうどその頃、ブリュンヒルトは養い父ヘイミルのもとに戻っていたため、シグルズとブリュンヒルトはそこで再会することとなる。愛を打ち明けるシグルズに対して、ブリュンヒルトは「あなたはキューキの娘グズルーン (Gudrun) を娶<sup>めと</sup>ることでしょう」と占う。これに対してシグルズは「王の娘などにはひっかかりません」と言いながら、ブリュンヒルトを妻にするか、さもないければ結婚は絶対にしないことを誓うと、彼女も同様のことを誓い、二人はこうして婚約の誓いを新たにしたのである。

28) 拙著：『ニーベルンゲンの歌』——構成と内容—— 44-45頁参照。

29) 菅原邦城訳：ゲルマン北欧の英雄伝説——ヴォルスンガ・サガ—— 58-75頁参照。

ヴァーグナーが『ジークフリート』第三幕におけるジークフリートとブリュンヒルデとの愛の結びつきを描く際に素材として用いたのは、明らかに上記の『ヴォルスンガ・サガ』であり、しかもその二重の婚約のうち、最初の婚約エピソードの方である。もっともヴァーグナーはこのジークフリートとブリュンヒルデの愛による結びつきを彼独自の方法で敷衍させている。まず第一場に挿入されているさすらい人（ヴォータン）とエルダとの対話は、『歌謡エッダ』中の「バルドルの夢」（Baldrs draumar）を踏まえたものと言われている<sup>30)</sup>が、その対話の内容はもちろんヴァーグナーの創作によるものである。そこではジークフリートがやがてヴォータンの愛娘ブリュンヒルデを目覚めさせる運命が、ヴォータン自身の言葉によって明示されている。否、それどころか、その対話の冒頭でヴォータンが先妻エルダに向かって「起きろよ、ワーラ！目覚めよ、ワーラ！長い眠りからわしはまどろむお前を目覚めさせる」（Wache, Wala! / Wala, erwach! / Aus langem Schlaf / weck ich dich Schlummernde auf.）と叫ぶ言葉は、ジークフリートのこれから先の行為を先取りするもので、すべてがブリュンヒルデの目覚めに結びつけられていることが容易に理解できよう。続く第二場でさすらい人（ヴォータン）がジークフリートの行く手を阻むエピソードについても、それがギリシアのオイディプス伝説に基づく<sup>31)</sup>ものであるにしても、ヴォータンの威嚇はジークフリートがブリュンヒルデの眠る岩山に辿り着くための最後の関門である。ジークフリートはそのヴォータンの槍を折る<sup>32)</sup>ことによって、そこを通過する資格を得たと言えるのであり、ヴォータンの方も今やすべてをジークフリートに委ね、それ以後は舞台から姿を消すのである。

ともかくこうして「光り輝く道」を切り開いたジークフリートは、ついに炎を乗り越えて岩山の頂上に辿り着くと、最終場面の第三場である。ここで展開

30) 三光長治・高辻知義・三宅幸夫編訳：『ジークフリート』 白水社1994年121頁参照。なお、「バルドルの夢」については谷口幸男訳：エッダ——古代北欧歌謡集（新潮社）199-200頁参照。

31) 同上書 135頁、168頁及び三光長治：ジークフリート（「思索する耳」同学社所収）34-35頁参照。

32) この場面でジークフリート自身がさすらい人（ヴォータン）に向かって、「父の敵<sup>かたき</sup>だ。こんなところにいたのか。うまいぐあいに復讐ができるぞ」（Meines Vaters Feind! / Find ich dich hier? / Herrlich zur Rache / geriet mir das!）と言っていることから察するに、以前第二幕のところで削除されていた「父の仇討ち」のエピソード（本稿註23参照）がここに移されていると理解することもできよう。

されるブリュンヒルデの目覚めは、明らかに『ヴォルスンガ・サガ』に由来するが、ヴァーグナーの創作による要素が多分に織り込まれて、独特の世界が展開されていることは言うまでもない。特に岩山の頂上でジークフリートが武装して眠っている人間を見つけ、それが男性ではなく、女性であることを悟り、「これは男ではない」(Das ist kein Mann!)と驚き叫んで、飛び上がる場面などは、ヴァーグナー独特の表現の一つである。

Brennender Zauber

zückt mir ins Herz;

feurige Angst

faßt meine Augen:

mir schwankt und schwindelt der Sinn!

燃えるような魔力が

私の心をとらえる。

火のような不安が

私の目をとらえる。

私の意識はよろめき、くらむ!

ジークフリートは生まれて初めて異性の姿を目の前にして、「燃えるような魔力」と「火のような不安」を覚えるが、このときヴァーグナーのジークフリート像に特有なものとして、ジークフリートは無意識的に助けを母親に叫び求めている。

Wen ruf ich zum Heil,

daß er mir helfe?

Mutter, Mutter!

Gedenke mein!

助けてくれと

誰に救いを求めようか?

お母さん、お母さん!

私のことを思い出して!

このように母親に救いを求めながら、ジークフリートは、気を失ったかのように、ブリュンヒルデの胸に倒れかかる。彼は一瞬にも、目の前のブリュンヒルデを母親だと錯覚したようである<sup>33)</sup>。長い沈黙のあと、彼は溜め息をつきながら、飛び上がって、再び戦慄を言葉にして表わす。

Mir schwebt und schwankt

und schwirrt es umher!

私の周りは空に舞い、

よろめき、グルグル回る!

33) 三光長治・高辻知義・三宅幸夫編訳：『ジークフリート』(白水社) 149頁参照。  
なお、本稿註26参照。

Sehrendes Sehnen	激しいあこがれが
zehrt meine Sinne;	私の意識を食い尽くす。
am zagenden Herzen	臆病な心に
zittert die Hand!	手がふるえる!
Wie ist mir Feigem?	臆病にも私はどうしたことか?
Ist dies <u>das Fürchten</u> ?	これが <u>恐れ</u> というものなのか?
O Mutter, Mutter!	ああ、お母さん、お母さん!
Dein mutiges Kind!	あなたの勇敢な子供!
Im Schlafe liegt eine Frau:	ここに眠っている一人の女性が
die hat ihn das Fürchten gelehrt!	恐れというものを教えてくれた!

森の中で竜を目の前にしても学べなかった「恐れ」というものを、ジークフリートはこの岩山で異性を目の前にして初めて体験したのである。「恐れ」を感じたことは、ジークフリートが人間の性に目覚めかけた証左である。しかし、彼はまだ完全に目覚めたわけではない。

Wie end ich die Furcht?	どうしたらこの恐れはなくなるのか?
Wie faß ich Mut?	どうしたら勇気が取り戻せるのか?
Daß ich selbst erwache,	私自身が目覚めるためにも、
muß die Maid ich erwecken!	私はこの乙女を目覚めさせねばならぬ!

ジークフリートが真の意味で目覚めるためには、目の前の乙女をまず彼が目覚めさせねばならないのである。そのためジークフリートは、乙女を目覚めさせようと、再び彼女のところに近寄るが、ますます甘美な思いにとらわれる。

Süß erbebt mir	彼女の花咲くような口もとが
ihr blühender Mund.	私に向かって甘く震える。
Wie mild erzitternd	その口もとは何と柔らかく震えながら
mich Zagen er reizt!	臆病な私をとらえるのか!
Ach! Dieses Atems	ああ! この吐息の
wonnig warmes Gedüft!	この上なく幸せな暖かい香りよ!
Erwache! Erwache!	目覚めよ! 目覚めよ!
Heiliges Weib!	神聖な女性よ!

このように叫んで、ジークフリートは彼女をじっと見つめる。しかし、彼女にはそれが聞こえないようである。「それならば、たとえこの身が減じようと、私がこの愛らしい唇から彼女の<sup>いのち</sup>生命を吸い上げることにしよう」(So saug ich mir Leben/ aus süßesten Lippen,/ solt' ich auch sterbend vergehn!)と決意して、ジークフリートは眠れる乙女の上に身を沈め、目を閉じたまま唇を重ねる。唇を重ね合わせるジークフリートの行為——『ヴォルスンガ・サガ』には見出されない——は、グリム童話の『いばら姫』(Dornröschen)のモチーフに由来するものと考えてよいであろう<sup>34)</sup>。王子の口づけを受けて百年の眠りから目覚めたいばら姫のように、ブリュンヒルデもジークフリートの口づけによって長い眠りからようやく目覚めるのである。

Heil dir, Sonne!	太陽に祝福を!
Heil dir, Licht!	光に祝福を!
Heil dir, leuchtender Tag!	明るい昼間に祝福を!
Lang war mein Schlaf;	私の眠りは長かった。
ich bin erwacht.	私は目覚めたのです。
Wer ist der Held,	私を目覚めさせてくれた
der mich erweckt?	英雄はどなたですか?

ジークフリートはブリュンヒルデの目と声に厳かに感動し、縛りつけられたように立って、自らの名前を名乗る。

Durch das Feuer drang ich,	岩山のまわりに燃えていた
das den Fels umbrann;	炎を越えて私はやって来た。
ich erbrach dir den festen Helm:	そしてあなたの固い兜を断ち切った。
Siegfried bin ich,	あなたを目覚めさせた私は、
der dich erweckt.	ジークフリートです。

ブリュンヒルデは予期していたジークフリートに「目覚めさせられた」喜びを表わしながら、神々と世界、そして光り輝く大地に挨拶を送ると、ジークフリートもまた同時にブリュンヒルデの「瞳を見る」喜びを表わしながら、自分を生んだ母親と自分を育てた大地に祝福の挨拶を送る。生命に目覚めたブリュンヒ

34) 三光長治・高辻知義・三宅幸夫編訳：『ジークフリート』(白水社) 147頁参照。

ルデと異性に目覚めたジークフリートは、ずっと以前から愛し合っていたかのようである。ブリュンヒルデはジークフリートを生んだ母親と彼を育てた大地への祝福を繰り返したあと、二人の宿命的な契りを称え、ジークフリートが生まれる以前から彼を愛していたことを打ち明ける。

O Siegfried! Siegfried!	ああ、ジークフリート！ジークフリート！
Seligere Held!	この上なく幸せな英雄よ！
Du Wecker des Lebens, siegendes Licht!	生命を目覚めさせたあなた、 勝利を収める光よ！
O wüßtest du, Lust der Welt, wie ich dich je geliebt!	ああ、この世の喜びよ、私があなただけを 以前から愛していたことを知ってくれたら！
Du warst mein Sinnen, mein Sorgen du!	あなたは私の心でした。 あなたは私の心配でした！
Dich Zarten nährt' ich, noch eh du gezeugt; noch eh du geboren, barg dich mein Schild:	あなたが生まれる前に、 私はか弱いあなたを養っていたのです。 あなたが生まれる前に、 私の楯があなたを覆い隠していたのです。
So lang lieb ich dich, Siegfried!	そんなにも前から私はあなたを愛して いたのです、ジークフリートよ！

ブリュンヒルデのこの言葉にジークフリートはまたもや一瞬、ブリュンヒルデを母親だと錯覚し、静かにおずおずと「ではお母さんは死ななかつたのですか。愛する母は眠っていただけですか」(So starb nicht meine Mutter?/Schlief die minnige nur?)と問いかける。ブリュンヒルデは、微笑みを浮かべ、やさしそうに手を彼の方にのばしながら、答える。

Du wonniges Kind!	あなた、かわいい子供よ！
Deine Mutter kehrt dir nicht wieder.	あなたのお母さんは もう戻っては来ません。
Du selbst bin ich, wenn du mich Selige liebst.	幸せなこの私を愛するなら、 あなた自身は私となります。
Was du nicht weißt, weiß ich für dich; doch wissend bin ich	あなたの知らないことは、 あなたに代わって私が知っています。 しかし、私に知識があるのは、

nur — weil ich dich liebe!	ただあなたを愛しているからです。
O Siegfried! Siegfried!	おお、ジークフリート！ジークフリート！
Siegendes Licht!	勝利の光よ！
Dich liebt' ich immer;	あなたを私はいつも愛していたのです！
denn mir allein	というのも、ヴォータンの考えが
erdünkte Wotans Gedanke.	私だけには分かっていたのですから。

こうして過去のことを語り始めたブリュンヒルデは、しかし、自分とともに目覚めた愛馬グラナーネが縦の木<sup>もみ</sup>のところで草を食べている光景や、自分をおおっていた楯と兜、そして鎧が近くに落ちているのを目にして、現在の自分が過去の自分ではないことに気づくと、次第に憂いを感じ始める。反対にジークフリートの方は、岩山で燃えていた炎が今や自分の胸の中で燃えてくるのを感じるばかりである。「ああ、あなた、どうかこの火を消して下さい。たぎる灼熱を冷やして下さい」(O Weib, jetzt lösche den Brand! / Schweige die schäumende Glut!) と胸の炎を堪え切れずに、ジークフリートがブリュンヒルデを力強く抱き締めるや否や、彼女は飛び上がり、恐れに激しく抵抗して、憂いを言葉にして表わす。

Kein Gott nahte mir je!	どんな神も今まで私に近づかなかった！
Der Jungfrau neigten	この乙女には英雄たちも
scheu sich die Helden:	恐れて頭を下げたものです。
heilig schied sie aus Walhall!	神聖な身で彼女はワルハラから離れた！
Wehe! Wehe!	悲しや！悲しや！
Wehe der Schmach,	悲しい恥辱、
der schmähhlichen Not!	屈辱的な苦痛！
Verwundet hat mich,	私を目覚めさせた男が
der mich erweckt!	私を傷つけたのです！
Er erbrach mir Brünne und Helm:	彼は私の鎧と兜を引き裂いた。
Brünnhilde bin ich nicht mehr!	私はもはやブリュンヒルデではない！

ブリュンヒルデ (Brünnhilde) はかつて、その名前が示す通り、「鎧」(Brünne) を身につけ、「戦い」(Hilde) に臨む<sup>35)</sup> ヴァルキューレ (戦乙女<sup>いくさおとめ</sup>) であった。「鎧」(Brünne) と「兜」(Helm) を身につけている限り、彼女は父ヴォータンの意志を受けて行動するヴァルキューレ (戦乙女) であったが、しかし、ジークフリー

35) 同上書 (白水社) 155頁参照。



トが彼女の「兜」をはずし、彼女の「鎧」を切り裂いたことで、ブリュンヒルデはもはやヴァルキューレ（戦乙女）ではない。今や神格を剥奪され、しかも無防備の人間の女性に過ぎないことを悟ると、突然彼女は未来の自分に不安を覚え始めたのである。ジークフリートが先程初めて異性を前にして恐れを覚えたように、ブリュンヒルデもまた人間の性愛を目の前にして恐怖を覚えたと言ってもよいであろうか。いずれにせよ、現在の自分が過去の自分ではないことに気づいて、未来の愛に不安を覚えるブリュンヒルデは、過去の自分からまだ完全には目覚めてはいないと言わなければならない。そのことをジークフリート自身も強い調子で彼女に訴えかけている。

Noch bist du mir	あなたはいまだに
die träumende Maid:	夢見る乙女です。
Brünnhildes Schlaf	ブリュンヒルデの眠りを
brach ich noch nicht.	私はまだ破ってはいなかった。
Erwache, sei mir ein Weib!	目覚めよ、私の妻になって下さい!

このようにますます激しく攻め寄せてくるジークフリートに対して、今や無防備のブリュンヒルデは、人間の性愛に恐怖を覚えながら、唯一残された武器ともいべき言葉を用いて自らの身を護ろうとする。彼女は自らを「小川の澄んだ水面」(die klare Fläche des Bachs)になぞらえてジークフリートに次のように訴えかけるのである。

Sahst du dein Bild	あなたは自分の姿を澄んだ
im klaren Bach?	小川の中で見たことがありますか?
Hat es dich Frohen erfreut?	それは快活なあなたを喜ばせたでしょう?
Rührtest zur Woge	水をかきたてて
das Wasser du auf;	波を立てると、
zerflösse <u>die klare</u>	<u>小川の澄んだ水面は</u>
<u>Fläche des Bachs:</u>	とけてなくなってしまいます。
dein Bild sähst du nicht mehr,	あなたの姿はもう見られません。
nur der Welle schwankend Gewog'.	見えるのはゆらめく波のうねりだけ。
So berühre mich nicht,	だから私にさわらないで下さい、
trübe mich nicht!	私を濁らせないで下さい!
Ewig licht	すると永遠に明るく

lachst du selig dann	あなたは幸せに
aus mir dir entgegen,	笑顔を私に写すことができるのです。
froh und heiter ein Held!	楽しく快活な英雄!
O Siegfried!	ああ、ジークフリート!
Leuchtender Sproß!	輝く若葉!
Liebe dich	自らを愛し、
und lasse von mir:	私からは離れて下さい。
vernichte dein Eigen nicht!	あなた自身のものを壊さないで下さい!

巧みな比喩を用いて必死に自らの「清らかな身」を護ろうとするブリュンヒルデに対して、ジークフリートはまさに彼女が用いた小川の比喩をそのまま巧みに引用して、ますます激しい「攻撃」を加える。

Ein herrlich Gewässer	すばらしい小川が
wogt vor mir;	私の前で波立っています。
mit allen Sinnen	すべての心を捧げて
seh ich nur sie,	私はそれだけを眺めています。
die wonnig wogende Welle.	その愛らしく波立つ波を。
Brach sie mein Bild,	波が私の姿を壊してしまえば、
so brenn ich nun selbst,	私は自らを燃え上がらせよう。
sengende Glut	そして焼き焦がす炎を
in der Flut zu kühlen;	波の中で冷やすため、
ich selbst, wie ich bin,	私自身、あるがままのこの姿で、
spring in den Bach:	小川の中に飛び込むことにしよう。
O daß seine Wogen	ああ、その波が
mich selig verschlängen,	私をこの上なく幸せにのみこんで、
mein Sehnen schwänd'	私のあこがれは
in der Flut!	波の中に消えてくれれば!
Erwache, Brünnhilde!	目覚めよ、ブリュンヒルデ!
Wache, du Maid!	目覚めよ、乙女!
Lache und lebe,	いと甘き喜びよ、
süßeste Lust!	ほほえみ、生きよ!
Sei mein! Sei mein!	わがものとなれ! わがものとなれ!
Sei mein!	わがものとなれ!

ブリュンヒルデは唯一残された武器であった言葉でもジークフリートの「攻撃」を防ぐことができずに、今や抵抗することを断念して、永遠にジークフリートのものになることを決意する。彼女自身がそのとき口に出しているように、「天上の知識は消え去り、愛の歓喜がそれを追い払った」(Himmliches Wissen/ stürmt mir dahin,/ Jauchzen der Liebe/ jagt es davon!)のである。この瞬間ブリュンヒルデは過去の自分から目覚めて、愛する一人の女性に生まれ変わったと言ってよいであろう。

Ob jetzt ich dein?	今、私はあなたのものなのかしら？
Siegfried! Siegfried!	ジークフリート！ジークフリート！
Siehst du mich nicht?	あなたは私が見えないのですか？
Wie mein Blick dich verzehrt, erblindest du nicht?	私の目があなたを焼き尽くすとき、 あなたは盲目になりませんか？
Wie mein Arm dich preßt, entbrennst du mir nicht?	私の腕があなたを押さえつけるとき、 あなたは燃え上がりませんか？
Wie in Strömen mein Blut entgegen dir stürmt, das wilde Feuer, fühlst du es nicht?	私の血が奔流となって あなたに向かって流れ出すとき、 あなたは激しい炎を 感じないのですか？
Fürchtest du, Siegfried, fürchtest du nicht das wild wütende Weib?	ジークフリート、あなたは 激しく荒れ狂うこの女性を 恐れないのですか？

ここで「恐れ」のモチーフが最後に用いられているが、ジークフリートはブリュンヒルデの表現をそのまま利用しながら、答える。

Ha!	ああ！
Wie des Blutes Ströme sich zünden,	血の奔流に 火がつくとき、
wie der Blicke Strahlen sich zehren,	目の輝きが 食い尽くすとき、
wie die Arme brünstig sich pressen,	腕が激しく 押しつけるとき、
kehrt mir zurück	私の大胆な勇気が

mein kühner Mut,	また私に戻ってくる。
und das Fürchten, ach!	そして私が決して学べなかった
das ich nie gelernt,	恐れというものを、ああ!
das Fürchten, das du	あなたが私に教えてくれたばかりの
mich kaum gelehrt:	恐れというものを、
das Fürchten — mich dünkt,	愚かな私は今またすっかり
ich Dummer vergaß es	忘れてしまったように
nun ganz!	思われる。

初めて異性を目の前にして「恐れ」というものを体験したジークフリートは、今やそれをすっかり克服することによって、新しい人間へと脱皮したと言える。一方、恐怖におののいていたブリュンヒルデもようやく愛の歓喜に火がついて、<sup>たけ</sup>唖り立ったような笑い声を上げる。それぞれに「恐れ」を克服したジークフリートとブリュンヒルデは、こうして新しい人間の愛に生きることを決意して、愛の二重唱を歌い始め、ブリュンヒルデが神々のワルハラの世界に別れを告げて、新しい人間の愛の世界へ入ることを歌い上げれば、ジークフリートも自らが目覚めさせたブリュンヒルデの愛に生きることを力強く歌い上げる。喜びでありながらも、しかし不吉なものの子兆に満ちた愛の二重唱が二人によってみごとに歌い上げられたところで、第三幕の幕が下りる。楽劇『ジークフリート』の物語はこうしてひとまず完結するのである。

### 結び

以上のように見てくると、ニーベルンゲン伝説の英雄ジークフリートに関わる一連のエピソードには実にさまざまなタイプの伝承があり、作品によってそれぞれ多少の相違を示していることが容易に理解できよう。そしてこのように数多く存在するジークフリート伝承の中でもヴァーグナーが楽劇『ジークフリート』の素材に用いたのは特に北欧の『歌謡エッダ』と『ヴォルスンガ・サガ』であることも、もはや改めて指摘するまでもあるまい。ヴァーグナーはこの北欧の伝承を主な素材としてかなり忠実に利用しながら、しかし、そこで形象化されたジークフリート像は、素材のそれとは著しく異なっている。素材の北欧伝承では英雄ジークフリートの性格づけがほとんどなされていないのに対して、ヴァーグナーの『ジークフリート』では主人公ジークフリートのきめ細かな心理描写とその成長過程が生き生きと描かれているのである。

第一幕では、すなわち、腕白少年ジークフリートは森の中で小鳥や動物たち

と一緒に暮らしているうちに、生き物には雄と雌がいて、それぞれ仲睦まじく生活を営んでいる姿を見て、それが愛というものであることを悟ると、次には自我というものにも目覚めて、その目覚めの最初の表われとして両親への思慕をつのらせてゆく。養父ミーメから本当の両親がもはやこの世にいないことを聞き知ると、ジークフリートは父の形見である名剣ノトウングを鍛え直し、それをもって森の中から広い世の中へ出て行くことを望むようにもなる。しかし、この時点でのジークフリートは、指環強奪を目論む狡猾なミーメに唆されて、「恐れ」を知るために竜ファーフナーの棲む森へ出かけて行くほど、無邪気な少年である。

第二幕でも、竜の棲む森に到着したジークフリートは菩提樹の下にすわって相変わらず両親への想いに耽っている。母の胎内を思わせるような菩提樹の下で、少年は今や人間の子としての自我に目覚めようとしているのである。従って、そのあとの竜退治は、「恐れを知る」ため、換言すれば、自らを知るため、まさに自らのアイデンティティを求めての戦いなのである。しかし、少年は竜から「恐れ」も自分の「素姓」も教えてはもらえなかった。知識を与えてくれたのが小鳥である。彼は打ち倒した竜の血を舌になめることで、小鳥の声が理解できるようになっていたのである。小鳥の忠告によって彼は、初めて財宝のことを知り、洞穴の中へ入って行って、指環と隠れ兜を獲得する。また小鳥から養父ミーメが悪企みを抱いていたことを聞き知ると、ジークフリートは不実なミーメを一刀のもとに斬り倒してしまう。さらにジークフリートは、孤独感から「連れ合いがほしい」ことを小鳥に訴えかけると、小鳥は炎に囲まれた岩山の上にブリュンヒルデが眠っていることを教える。小鳥の声からこの異性の存在を聞き知るや否や、ジークフリートは自分の胸が激しく燃え上がるのを感じる。ジークフリートはここで初めて異性への愛にも目覚め、愛の喜びに駆り立てられて、ブリュンヒルデの眠る岩山へと向かうのである。

第三幕で炎を乗り越えて岩山に辿り着いたジークフリートは、異性を目の前にして初めて「恐れ」というものを体験する。人間としての性への目覚めの証左である。しかし、真の意味で目覚めたのではない。彼が目覚めるためには乙女も目覚めなければならない。そこで彼は口づけによって乙女を目覚めさせる。この目覚めはブリュンヒルデにとっては生命の目覚めを意味し、ジークフリートにとっては愛の目覚めを意味する。ブリュンヒルデの目覚めによってジークフリートはブリュンヒルデへの愛に目覚め、無邪気な腕白少年から愛する人間ジークフリートへ生まれ変わったのである。ジークフリートはこうしてブリュンヒルデという異性を通じて初めて自らのアイデンティティを見出したと言え

るのである。

このように楽劇『ジークフリート』では「恐れを知る」モチーフがとりわけ重要な役割を果たしていることが明らかである。このモチーフがグリム童話の『怖れを学ぶために旅に出た若者の話』に由来することは、上ですでに指摘しておいたが、まさにこのモチーフが作品全体に張りめぐらされることによって、楽劇『ジークフリート』は若きジークフリートの目覚めの物語、自己のアイデンティティを探求する物語となったと言ってもよいであろう。目覚めるのはブリュンヒルデだけではなく、彼女の目覚めとともにジークフリートもまた異性への愛に目覚めてゆくのであり、その目覚めの過程で主人公の内面が深く彫り下げられているところにこの作品の特質があるのである。このような個性的なジークフリート像は従来のニーベルンゲン伝承には見られないものである。ヴァーグナーのジークフリートは、もはやニーベルンゲン伝説の伝統的な不死身の英雄ではなく、何よりもまず異性の愛に目覚めた人間であり、人類の未来の愛の象徴であると言えよう。すなわち、ジークフリートは、愛のみが支配する新しい秩序の世界を築き上げることのできる英雄の象徴であり、新しい人間の世界の建設は今やこの新たな英雄ジークフリートの手に委ねられたのである。ところが、こうしてブリュンヒルデを通じて初めてジークフリートの中に芽生えてきた愛は、やがて『神々の黄昏』において仇敵ハーゲンの象徴する権力と宿命的に対立し、邪悪なハーゲンの<sup>はかりごと</sup>謀の餌食となる運命にあるのであるが、その愛と権力の相剋については稿を改めて詳述することにしよう。

(1995・8・31)

\* 本稿執筆にあたって『ジークフリート』のテキストには Richard WAGNER: Siegfried. Zweiter Tag aus dem Bühnenfestspiel >>Der Ring des Nibelungen<< eingeleitet und herausgegeben von Wilhelm ZENTNER. Philipp Reclam Jun. Stuttgart 1979.を用い、原文を訳出する際には下記の三つの邦訳を随時参照したことを付記しておく。

渡辺護訳：ニーベルングの指環 (Notes & Libretto) キングレコード株式会社1978年  
 天野晶吉訳：ニーベルングの指環 対訳台本ーライトモチーフ譜例付 新書館1990年  
 三光長治・高辻知義・三宅幸夫編訳：『ジークフリート』 白水社1994年